新篁葉集

卷一

昭和十三年一月十六日印刷
昭和十三年一月二十日發行

新萬葉集　第一卷

編纂代表者　山本三生

發行者　山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者　村尾一雄
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌　改造社
東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一自至一一二四番

（兩角製本）

目次

―作者別氏名五十音順―

あの部……三
いの部……一四一
うの部……三七六
作者略歴……四五六

○裝幀　横山大觀
○題簽　比田井天來

第一卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

阿賀正養

二人入る今宵の風呂したのしくて兄が洗ふを我見つつ居り

阿形弘一

羊齒深き宮山裏の夕翳り岩間にしぶくせせらぎの音

阿澄一三

海草に花咲くごとく群れとまる紅き葉虎魚の息づかひ見ゆ（甲子園水族館）

くらき土間に妻歸り來ぬ音たててたためる傘の凍てつけるらし

雲水寺の墓地より見ゆるビルディング雪降る中に灯り聳ゆ（茶臼山雲水寺）

留學の志立て日程を誌したる古き地圖出でて來ぬ

時雨ふる大原みちをはろか來つ障子を閉めて小さき寺あり（寂光院）

山の上の遊歩道路は草闌けて北寄りに吹く風秋づきぬ（六甲山上）

大き瓶のどこよりか水の洩るるごとく思はれて一夜われはねむらず

阿仁牧村

みちのくの大わだつみの陽の沒りに男鹿半島は黑く横たふ

阿部晃

轉任の命をうけて上海へ渡る

さかのぼる河の岸べに波なしてなびかふ草や夏ふけにけり

海の上

靄深くほのかに鐘の音きこゆいましめあひて船のゐるらし

海の上をうごきつつある一團のもやの中へとわが船すすむ

ひた押しにおし高まれるうねり浪ひろき波面にしづけし陽の光り

わが船にせまりて波の高まるやはるけき海のつとかくれたり

戰近づく上海

おもくるしき夜を遠々の砲聲に耳かたむけて妻もゐるらし

南京夜情 二首

おぼろ夜の河岸(かし)を畫舫のはなれつつほのかに水の古りし匂ひす

水のもに灯かげはながし夜泊りの畫舫にひびく麻雀の音

灯のもとにもろ葉つやもち色ふかしいよいよしろき白百合の花

吾兒

飛びあがることをおぼえてとぶとする幼兒の足土をはなれず

動亂の傍に

避けがたき事起るらし街中に鐵條網を張りいそぎ居る

沈む陽のかげをさへぎり大き帆がわが前に來つしづかに過ぎ行く

澳門行 一首

沖遠く戎克群れたり支那海に一代をおくる命をぞおもふ

驟雨すぎてなごみわたれる秋の海燈臺しろく視界に入り來つ

庭さきに朝かげしろき椿葉を寒けきものに見つつし坐る

阿部鳩雨

山峽のみどりととのひ遠く見る草家おほむねかくろひにけり

おとろへし蟬こもり鳴く裏山に夏も終りのひかり沁むなり

緣に上げし鉢の夕顏莟とけてわが見る前に花となりゆく

夜の風を室に涼しむわが前におもむろに搖るる夕顏の花

馬追の淺夜を澄みて鳴くこゑは室の灯とどく庭草の上

窓巾に室の灯とどく庭草の夜更けの色はすずしさを持つ

秋の陽のとどかずなりし庭にして山梔(くちなし)の實のはやく色づく

この朝明(あさけ)桑のもろ葉の霜に落つる音かすかなり家をめぐりて

青くして霜に落ちやまぬ桑の葉やこのひと朝に落ちつくすらし

佛法僧鳥を聽かむと奥上州の迦葉山にのぼる

深谿の青葉曇れば山の雨たちまち暗き路に音する

谿奥の山に寺ありと思へども下りくる人に逢ふこともなし

赤城山にのぼり湖畔の宿に一泊

顔あげてわれらを目守り立つ馬に牧原の路をあゆみ近づく

みづうみの水照(みてり)の中を榜(こ)ぐ舟に山よりとどくうぐひすの聲

すみやかに霧うごきゆき牧の馬わが眼の前に見えてかくるる

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

瀧空に群れ光りつつ飛ぶものは岩つばめならむ蜻蛉とも見ゆ

阿部錦子

拭きあげし縁のひかりも廣き家の冷え冷えとして身に迫るなり

縁先の子が塗下駄にかそかなる夕月の光はやながれたり

わが髪にしめりもたせて降る雨や一夜に桃は紅ふふみたり

阿部小枝子

ネクタイを結びやりつつふと見たる兄の眞顔は何かゑましき

阿部武治

夜逃げせる農夫與七の破ら家は大き氷柱に傾きてあり

阿部龍夫

松前丸向きをかへたればをりからの西日に眩しその半舷は

阿部靜枝

震災の折に

震るる地におびえあかして今朝さむし倒れたる垣に朝顔咲けり

澄みきはみ空はしづけく秋立つに地は屍を燒き果てずあり

選擧戰の折に

夜に入りて働き疲れかへる夫を人多くゐれば寄りていたはらず

十和田湖

湖の色ふかく澄みつつ赭岩層のうつるところは紫となれり

湖の波幅大きくて光もてり流れつとびつ遊ぶ鵜あまた

歸郷

敷蒲團にもう寢しわれに着蒲團のよきを選みて母のかけます

御前崎にて　一首

兩側に海ひたせまる砂地の崎つくるきはまで芋畑なり

ゆきつまらば死なん力も湧き來べし今日を暮して思ふことなかれ

伊豆大島にて

三原山の坂をつくれる丸木より艶やけき葉の椿芽生えぬ

水平線に光らず赤き陽は落ちて島吹きしごく風空鳴りす

下田にて

岩まろぶ崎に續きて小島多し富士火山脈ここにて沈めり

奥羽線峠驛　一首

ポストより四五枚の葉書とりて下る郵便夫を見送る山驛の停車に

蘂をふかくつつむ花瓣の内面に艶あふれゐる大輪の菊

越後にて

家あればそこにかならず何の木か花咲ける越後國原の春

秋田在にて

つぎはぎの布子の兒ら並ぶ雨の日の教室臭(にほ)ふは貧困の香か

阿部千代子

背を向けてすね居る肩のかぼそきに言ひすぎし事悔まれにけり

阿部千鶴子

庭木々の根方をまるく降り殘しこの春の雪の多くは積らず

花ぐもりと云ふには寒きくもり日のうちつづきつつ春徂くらしも

今朝咲きし牡丹の花に蜂の來て花粉にまみれいつまでも居り

音あらく降り出でし雨に大輪の牡丹くづるるをいたましく見つ

長き入院生活をなし六月中旬やうやく退院

小夜ふけをふくろふ鳴けり家にある夫もめざめてききつつあらむ

命ありて明日は歸らむ吾が家の若葉の庭は清しかるべし

わが家ぞしみじみよけれたたみの上に床をしかせて心おちつけり

冬日光室いつぱいにさし入りて木影大きくたたみにうごく

阿部芙美子

悼犬養首相

老いらくの大人がほがらかに笑ましつつ言問はすこゑの今もきこゆる

ふるさとの吉備の人らが大人一人なげく嘆きのつくる日あらめや

阿部豐三郎

のびおそき麻畠みつつつくづくと貧しき生活思ひ居にけり

ふみ入ればげんげの花のきよらかさ靴の埃は拭はれにけり

朝鮮の乙女が着くる夏衣あはれ愛(かな)しき肌透かせたり（京城にて）

大岩の崩れ重なるあはひより山水噴きて虹あらはれぬ（金剛山にて）

阿部初枝

蚊やりして吾子の産着を縫ひあかすわれにもかかる日の來りけり

阿部政一

賀陽宮治憲王さま

學習院初等科の御服召させ給ひ宮様は頰赤くにこやかにます

阿部青杜

蓮の蕾のその尖秀(とがりぬ)の色の濃さ咲くべく力あつまりて見ゆ

一羽ゐて遠くは飛ばず啼きめぐる鵺(ひたき)に冬のさびしさは見ゆ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com